

珠玉の作品と心躍るステージ 3000人が地域の文化を味わう

市文化協会（谷晶子会長）主催の文化祭が、10月25日と26日、11月1日と2日の4日間にわたり、しこちゅくホールで開催されました。

会場には、書道から工芸まで約500点に及ぶ珠玉の作品が並びました。ステージでは、大正琴や尺八などの演奏、ダ



ンス、バレエなど、さまざまな演目が披露され、訪れた人々の目や耳を楽しませました。

また、生け花や三味線民話の読み語り体験会、お茶席、菊花展など、文化の魅力を存分に堪能できる催しが用意され、来場者は特別なひとときを過ごしました。

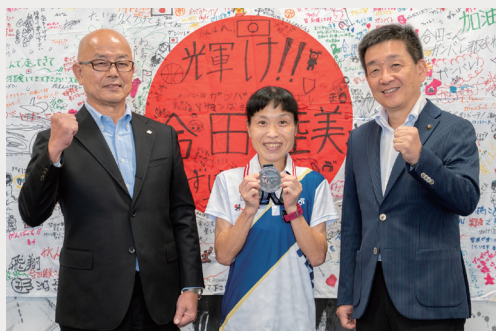
祝 公民連携・地方創生アワード受賞 GIGAしこちゅくに新たな栄誉



本市は、民間企業と協働で拡張現実（AR）教材「HADO」を日本で初めて義務教育に導入し、更にその実証研究を大学と共同で進めています。

こうした先進的なICT教育の取り組みが評価され、10月22日、一般社団法人公民連携推進機構主催の「公民連携・地方創生アワード」を受賞しました。

祝 世界2位 スカイランニング 合田睦美さんが快挙



市陸上競技協会所属の合田睦美さん（上分町）が、10月にブルガリアで開催された「マスターズスカイランニング世界選手権」に出場し、銀メダルの栄誉に輝きました。

10月14日、大西市長を表敬訪問した合田さんは、「仲間たちの寄せ書きに力をもらった」と、笑顔で大会を振り返りました。

新宮の秋を味わい尽くす一日 霧の森 秋の収穫祭が大盛況



11月2日、新宮町馬立の道の駅「霧の森」で秋の収穫祭が開催され、終日多くの観光客でにぎわいました。

会場では、新宮茶を始めとする特産品の即売会やダンスステージ、手もみ茶体験、苔玉作り体験など、秋の新宮を満喫できる多彩な企画が行われ、訪れた人たちの笑顔があふれていました。

おいでよ四国島へ 移住イベントに四国の魅力が集結



11月9日、金生公民館で市と県宅建協会四国中央地区連絡協議会（吉田茂生会長）が移住をテーマにしたイベントを開催しました。

「四国島まんなかライフフェア」と題したこのイベントは、各地の美食や雑貨が集まったほか、住まいや仕事に関する相談会も行われ、四国の魅力を伝える場となりました。

本紙上で紹介できなかった記事や写真は、ホームページ「まちの話題」に掲載しています



紙産業の現在地とこれから 愛大イノベーションセンターシンポジウム

10月30日、愛媛大学紙産業イノベーションセンター（妻鳥町）がシンポジウムを開催し、最新の活動や研究成果を発表しました。

基調講演を行った経済産業省の飯村亜紀子調整官は、国内外における産学官連携の動向や経済産業省が進めるイノベーション創出事業について紹介しました。また、川



経済産業省 飯村亜紀子氏



川之江造機 坂下聖和氏



愛媛大学 内村浩美センター長



子どもたちに起業家精神を育みたい 藤井財団がDVDを寄贈

藤井代表理事に代わって感謝状を受け取る実弟の藤井康弘さん



10月30日、本市出身の藤井勝典さんが代表理事を務める公益財団法人藤井財団（大阪府）から市内の小中学校と図書館に、日本の偉人をテーマにした「世のため人のためアニメシリーズ」のDVDなどが寄贈されました。同財団では、さまざまな偉人に焦点を当てた絵本やアニメを制作し、寄贈しています。

地域の魅力を活かした観光振興に 新東亜工業がふるさと納税



東京都墨田区に本社を構え、マンションやビルの大規模修繕工事などを手掛ける株式会社新東亜工業から、企業版ふるさと納税を活用して10万円が寄付されました。10月31日に市役所で行われた贈呈式に出席した高井 強代表取締役社長は、「ふるさととの振興につなげてほしい」と語りました。

私の地元をもっと元気に 明治安田生命が寄付金を贈呈



明治安田生命保険相互会社では、従業員が出身地や居住地などゆかりのある地域を応援する「私の地元応援募金」を実施しています。11月4日、松山支社の中山悟司市場統括部長が市役所を訪れ、寄付金約81万円の目録を大西市長に贈呈しました。寄付金は、児童福祉の推進に役立てられます。

「わたSHIGA輝く障スポ」 フライングディスク 河村広さんが出場



市障がい者福祉団体連合会川之江支部会員の河村 広さん（三島金子）が、5月に開催されたフライングディスク競技の県大会で優秀な成績を収め、10月に滋賀県で行われた全国大会への出場を果たしました。河村さんは10月14日に大西市長を表敬訪問し、大舞台での活躍を誓いました。



祝 三島小学校 創立150周年 音楽と書道で未来を描く

11月2日、創立150周年を迎えた三島小学校で同校トランペットクラブと三島東中学校吹奏楽部、書道パフォーマンス甲子園アンバサダーの青柳美扇さんによるスペシャルパフォーマンスが行われました。総勢71人の迫力ある演奏と青柳さんの力強い書は、同校の未来への期待を力強く表現しました。



祝 上分小学校 創立150周年 校歌の大合唱で世界をつなぐ

10月19日、創立150周年を迎えた上分小学校で、記念式典が行われました。式典には、在校生を始め保護者や卒業生、地域住民など400人以上が集まりました。また、日本全国、世界各地で活躍する卒業生たちもオンラインで参加し、校歌の大合唱で式典を盛り上げました。



祝 寒川小学校 創立150周年 児童たちが次の50年へ思いをつなぐ

11月8日、寒川小学校の創立150周年を祝う記念式典が同校で開催され、在校生や地域住民、歴代の教職員ら約300人が節目の年を共に祝いました。式典では、児童たちが50年後の自分や未来の後輩たちに向けた手紙や写真、授業の様子を収めた映像などをタイムカプセルに入れました。



祝 金生第二小学校 創立150周年 書道パフォーマンスで思いを表現

11月8日、金生第二小学校で創立150周年を祝う催しが行われました。6年生と川之江高校書道部の書道パフォーマンスでは、校歌にも登場する同校のシンボル・高文珠山と共に歩んだ歴史を書で表現しました。更に、全校児童の手形も加えられ、思い出に残る特別な作品が完成しました。



全ての子どもたちの未来のために 宮口幸治さんの講演会に350人

11月8日、ベストセラー「ケーキの切れない非行少年たち」の著者で、立命館大学教授の宮口幸治さんの講演がユーホールで開催されました。宮口さんは、「発達に課題のある子どもたちが持つ、見る力、聞く力、考える力を育むことで、認知機能の向上につなげてほしい」と語りました。



野球やろうぜ 本市選手がハワイで交流試合

平成13年に発生した実習船「えひめ丸」と米国原子力潜水艦の事故で犠牲になった方を追悼し、両国の親睦を深めるための野球の交流大会がハワイ州で開催され、本市の小学生5人が出場しました。11月7日、大西市長を表敬訪問した選手たちは、日本とハワイの架け橋となる決意を述べました。



実家を空き家にしないために 人の終活・家の終活セミナー開催

10月11日、全国空き家アドバイザー協会協議会 県四国中央支部による「人と家の終活」をテーマにしたセミナーが、川之江ふれあい交流センターでありました。

参加者は、同協議会の河野公宏事務局長の講演やカードゲームを用いたワークショップを通じて、空き家の悩みを共有し、問題の解決策を模索しました。



いい関係は「褒める」から始まる あったか子育てセミナー開催

10月9日、「子どもといい関係をつくるヒント」と題した講演がしこちゅーホールであり、大勢の保護者や支援者が聴講しました。

講師の山内紀子医師は、「子どもの望ましくない行動には、冷静かつ中立的に対応し、普段から良い行動を具体的に褒めることで、信頼関係を築いてほしい」と述べました。

11月2日と3日の2日間にわたり、JR高松駅の高松オルネで、本市の「紙」をテーマにしたイベント「四国家のお宝マルシェ」が開催されました。

JR四国と川之江信用金庫が連携し、初めて行われたこのイベントでは、新宮茶や各種紙製品などの即売会に加え、水引細工や箔押し加工と手漉き和紙を組み合わせたワークショップなどを通じて、来場者に本市の魅力を存分に伝えました。



本市の「お宝」たちが出張 JR高松駅でマルシェ

カーテンコールに臨む 七十四の瞳

第10回を迎えた市民ミュージカルは、7月5日のオーディションを経て、河村英茂教育長を座長とする「四国中央ふれあい市民劇団」が結成され、時を経て最終的なキャストが35人に絞られた。

練習日は毎週月・水・土曜の19時から22時まで。福祉会館を主たる稽古場とした劇団の錬成は、11月29日・30日の二日公演をめざした。セリフ、芝居、歌、踊り：個性あふれる面々の苦悶の日々は、真夏を乗り越えて4カ月を超える長丁場となった。

今回のタイトルは「アイランド海に沈む王国」今わたしたちにできること。そのテーマは「防災・減災」共助による大地震への備えである。

脚本・演出は、今回も劇団サイケデリック・マンモスの山本淑子氏が務め、夫婦二人三脚で劇団を束ねてくれた。淑子氏は、小職の尊い同級生の一人で、その風貌から今や「山本総理」と呼んでいる。20年を超えた本市の市民ミュージカルは、合併の年に演じた郷土



逆風！
帆船！
四国中央市長
大西賢治

の児童文学作家・古田足日先生の原作による「うずしお丸の少年たち」を皮切りに、二年に一度の市民公募劇団編成で「風の王国」「君をおもいて風が吹く」「秘密の風船爆弾」「しこちゅー★クライシス」「ラブ・ミー・テンダー」「宇摩のシンデレラおさく」「あした来ない恋（古井）の池」「晴れ、ときどき不自由」と、キャストたちの人生ドラマとともに歴史を重ねた。

今回、何よりも感激したのが、共生社会をテーマとした前回作品に障がい当事者として出演したメンバーが、オーディションを経てキャストとなり、共生劇団としての公演になったことである。それに呼応する形で、小職も座長の教育長と共に配役を戴いた。

キャスト35人と演出の鞭を振るう山本夫妻。合わせて七十四の瞳は、振付・音楽・照明・衣装などのスタッフに支えられて、日々その眼光の鋭さを増してきた。

果たして、しこちゅーホールに集う観客の胸に、何かを響かせることができたろうか？